

# 30E13-pm03

二次元コードお薬手帳薬剤鑑査システムの臨床応用への期待

○本屋 敏郎<sup>1</sup>, 河内 明夫<sup>1</sup>, 曾根 佳祐<sup>1</sup>, 園田 純一郎<sup>1</sup>, 鳴海 恵子<sup>1</sup>,  
富重 恵利紗<sup>1</sup>, 早川 洋<sup>1</sup>, 井手尾 賢志<sup>1</sup>, 染川 孝佑<sup>1</sup>, 鶴 杏祐美<sup>1</sup>(九州保福大薬)

【目的】お薬手帳は複数医療機関受診患者の薬物療法を安全かつ効果的に行う上で有用なものであるが、その利用価値はさらに向上の余地がある。それを担うひとつが、処方薬剤とお薬手帳記載薬剤の鑑査精度の向上と考えられる。そこで我々は、処方薬剤の情報をお薬手帳ラベルへ二次元コードとして印字し、それをコードリーダーでレセプトコンピュータに読み込み、同コンピュータ内蔵の薬剤鑑査システムを用いて鑑査を行う「二次元コードお薬手帳薬剤鑑査システム」を開発した。今回、同システムを保険薬局薬剤師へ紹介し、臨床現場での応用に関する期待度を調査したので、その成績を報告する。

【方法】本システムは現在、レセプトコンピュータ Apobahn (イーメディカル)での運用が可能である。平成23年2月22日(大分市)と同年11月26日(宮崎市)、お薬手帳活用の現状と課題に関するこれまでの調査成績の紹介、並びに本システムの紹介を行った後、お薬手帳の薬剤鑑査の現状や本システムの活用に関する意見などについてアンケート調査を行った。調査対象者51名のうちアンケートに記載漏れのあった13名を除外した38名を解析対象者とした。

【結果・考察】お薬手帳記載薬剤と処方薬剤との薬剤鑑査は60%が薬剤師の知識の範囲内で行われており、20%が書籍を用い、16%がレセプトコンピュータを用いて行われていた。日常のお薬手帳の薬剤鑑査に関し、32%が「漏れが多くあるかも知れない」、66%が「少しはあるかも知れない」との回答であった。本システムの臨床での活用の可能性については、29%が「是非使いたい」、61%が「試してみたい」との意見であった。これらの結果より、本システムの臨床応用は、お薬手帳の利用価値を高め、薬物療法の向上に寄与できるものと考えられた。